

岐阜県嚥下障害研究会 モグモグ通信 No. 8 (2007. 1 発行)

今年も大勢
の皆様と研
修会でお会
いできるの
を楽しみに
しています。



発行所:岐阜県嚥下障害研究会
事務局:木沢記念病院 ST室

第9回 学術講演会 雑感

実行委員で参加しました・・・

一宮西病院 言語聴覚士 磯野 恵子

このたび、第9回学術講演会の実行委員として参加させていただきました。

随分前の勉強会に参加していた時のこと、研究会理事の方に呼び止められて、実行委員のお話をいただきました。随分前…、そう 随分前から実行委員会が結成され、今回の学術大会の準備が始まっていたのです。

当日の参加人数の多さに不安を感じながらも、この会を支えてきていらっしゃる先生方、諸先輩方と一緒に大丈夫だとの思いを胸に、床についたのが昨晚のようです。

過去の学術大会といえば、私の中では「STの定期同窓会」といったムードで、会場を歩いていれば たいい顔見知りの先生にお会いでき、そしてよく立ち話をしていたものです。しかし、今回の大会は違いました！ 初めてのお顔が大勢で…。参加者の内訳を見れば、ST以外の方の方が多く無理ありません。大きくなった会を喜ばしく思う反面、どことなく寂しさを感じていたのは 私だけでしょうか（インディーズの頃からサポートしていたグループが、プロデビューする瞬間のような…。← 無理して若者の例えをしてみました）。

岐阜の僻地で、日々の臨床に戸惑いながら、小さな勉強会で成長の日々を重ねてきた過去の経緯を振り返らずにはられませんでした。私はまだ中堅にも満たないSTですが、この会の歴史を少しだけ知っている身として、今回の成功はやっぱり、元岐阜のSTとして誇りに思いました。私のホームとしてこの研究会があることを再確認でき

た機会でした。皆さんにとっても、「よりどころの会」であることを願っています。



特別講演 講師
古澤正道 先生

第9回学術講演会
日時：H18.10.29（日）
会場：大垣市情報工房
参加者：306名

特別講演

「摂食・嚥下障害と
姿勢コントロール」

講師：古澤正道 先生
ボバース記念病院 PT

会場 客席風景



シンポジウム

シンポジウム

「摂食・嚥下障害における
チームアプローチの進め方
一病院・施設から地域へ」

座長：谷江・吉田 会員
司会：栗木・阿部・豊島・小川 会員



嚥下食コーナー



書籍コーナー

成人勉強会 レポート

食べることの喜び

下呂市立金山病院 看護師 藤村 朋子・中島 弘子
看護助手 中島鏡子・長尾すみ子

8月20日、第9回摂食・嚥下リハビリテーション
初級過程講習会に参加させていただきました。会場の
討議室が狭く感じられるほど、さまざまな職種の方
が多数参加されていました。

私たちの病院では、摂食・嚥下障害研究会が発足
されたばかりで、学ぶべきところが多々あります。
私自身も摂食にはあまり興味がなく、食べられな
ければ点滴か経腸栄養を行えばいいだろうという考え
しかありませんでした。

「食べること」それは、
日常生活において必要不
可欠で、食べられなけれ
ば体力の低下、栄養不良
となって生命に危機をも
たらすことになります。今まで食べられないことを
苦痛に感じたことがなかったのですが、今回の研修
会で、摂食・嚥下障害をおこす原因が多々あること、
それをさまざまな人たちの手でサポートしていかな
ければいけないことを学びました。



また、口腔ケアについての話もとても勉強になり
ました。口腔ケアも嚥下訓練のひとつであり、また
いろいろな疾病の予防になり、健康を保持増進させ
る大切なことです。個々にあったケアを行い、指導
していかなければいけないとあらためて思いました。

以前、在宅で寝たきりだった80歳の女性が、食
欲低下と肺炎で入院されました。入院時はアルブ
ミン値が低く、左大転子部に大きな潰瘍性の褥創があ
り、顔色もすぐれず、見るからに栄養状態が悪いと
感じられました。その後、徐々に食事が取れるよう
になり褥創も縮小、初めは発語すら聞かれなかった
のに、時々話されるようになりました。

このような患者様をみると、『食べられることはす
ごいことだ、身体的にも精神的にも向上につながる
んだ』と嬉しく感じられます。

まだまだ試行錯誤の段階ですが、今回の研修会で
学んだことを他のスタッフの方に伝え、統一したケ
アが行えるように努力したいと思います。ありがと
うございました。

(参加者107名、暑さと熱気に包まれつつ 摂食・
嚥下障害と口腔ケアの基礎知識および基本的対応を
学ぶ。)

技と情熱

土岐市立総合病院 言語聴覚士 志田 祐子

「運動の自由度の凍結からの解放—“知覚システ
ム”と“強調できる知覚システム”の再構築—」と
いうテーマにて、藤田保健衛生大学
衛生学部 教授 富田昌男先生(P.T)、
ならびに アシスタントの林ひろみ
先生(P.T)にご教授いただきました。



講師 富田先生

S.Tの立場から非常に感銘を受けたのは、顔面筋
へのアプローチの重要性です。他動的に表情筋を動
かすことが情動を生み出すことに繋がり、さらには

笑いが自律神経に作用して内臓を活発にし、生きる
力へと結びついていくという「連鎖反応」には本当
に感嘆しました。また、呼吸について、『口呼吸では
舌が乾くことから その周辺の扁桃輪の働きも制限
され、よって免疫機能が低下してしまう。臨床上 誤
嚥性肺炎と片付けられてしまいがちだが、実際は「免
疫機能」の問題であることが多い』という視点は、
急性期病院にいる身としては驚きと同時に非常に共
感できました。訓練を組み立てていく上で、鼻呼吸
を促していくことも訓練目標のひとつに加えていく
ことができるのではないかと思います。

実技指導では、2名の患者様へのデモンストレー
ションを拝見しました。技術はもちろんですが、最



初の導入部分である「いかに体を許してもらえるのか」が重要だということを実感しました。患者様とセラピストとの関係性、その中に患者様の生い立ち・性格・年代・社会的立場など様々な因子が絡ん

でおり、どこまでお互いの関係性を築き上げていくことができるのかが鍵なのだと認識しました。

NHK-TV番組『プロフェッショナル 仕事の流儀』の中で、感染症と闘う WHO 派遣医師 進藤奈那子さんは プロフェッショナルとは？ との問いに「技と情熱です」と語っていらっしゃいました。富田先生のデモンストレーションと講演中の流れる汗に このことばが鮮明によみがえりました。

先回（昨年8月）同様、実にエネルギーあふれるご講演をいただきどうもありがとうございました。

また このような素晴らしい機会を作っていただいたスタッフの皆様にも感謝申し上げます。

（9月30日～10月1日開催、参加者49名、実技演習や治療実施見学を含む濃厚な内容にて実施。）



講師の先生方
(畠山卓朗氏、宮崎みわ氏)

勉強会の中で見えてきたこと・・・

岐阜県立長良養護学校 教諭 旭 紀子

「心を育む・・・」、テーマを見た時はとても難しいなぁと感じました。しかし、実際に畠山先生・宮崎先生のご講演をお聞きし、それはちょっとした気づきを共にもつこと、スモールステップで成功体験を見に積んでいくことが大切なんだと実感しました。

一日目の畠山先生のご講演では、穏やかな口調の中にも利用者（技術支援を受ける者）の真のニーズを見つけることへの妥協のない先生のお気持ちが伝わり、とても胸に響きました。教育現場でも本人や家族のニーズをいかに引き出し、受け止めていくかは大きな課題です。見かけのニーズで立ち止まり自己満足していないだろうか。人との繋がりを基盤にしたその人のライフスタイルと一緒に考えることで、真のニーズを見つけることができるんだということを感じました。

午後のスイッチやBDアダプターの製作は初めての体験で少々不安もありましたが、一つの支援の方法として利用できるスイッチあそびをぜひとも自分のものにしたいと思わず気合が入りました。慣れない



ハンダづけも時間とともにコツをつかみ、もの作りの楽しさや子どもの成功体験とはこんな気持ちなんだと身をもって感じることができました。

二日目はワークショップ形式の中で、講師宮崎先生から投げ掛けられる質問に、「自分だったら・・・」と思いを巡らせ悩み続けた一日だったように思います。素晴らしい技術や物を単に用意したからといって実際場面で使えるわけではなく、その人の状態や生活環境をしっかりと理解した上で代替利用できるものを考えなければいけないこと。そして、共に考える上で沢山の引き出しを提供できるように、自分自身が人との繋がり（ネットワーク）をもち、自分



のアクティビティー（活動の利用場面）を見つめ、様々なライフスタイルを知ることが必要だなと実感させられました。

二日間とも子どもの支援方法について聞いていたつもりが、気がつけば我が身を振り返る機会となっ

たようです。とても有意義な時間でした。どうもありがとうございました。

（7月29日・30日開催、参加者61名。講義、スイッチ製作実習、ワークショップ研修と、コミュニケーション支援の実際についてじっくり学ぶ。）

実り多い一日

高山赤十字病院 理学療法士 柚原めぐみ

今回、「学齢期における脳性麻痺児の日常生活支援」のテーマで、心身障害児総合医療療育センター 作業療法士 佐々木清子先生の研修会に参加させていただきました。



講師 佐々木先生

飛騨地区には、障害児通園施設にリハビリのスタッフが配置されておらず、ほとんどの障害児が当院でリハビリを受けているのが現状です。そんな中、子どもたちはOTやSTの治療が始まるのを順番待ちにしている状態なため、PTとしてだけでなく、他職種からの目線でも子どもたちを見る力を付けられればという想いで受講しました。

先生のご指導はとてもわかりやすく、教科書・文献などで紹介されていないけれど、日常の場面で多く遭遇する症例をたくさんの写真を通して、いろんな関わり方を教えていただきました。どの症例も自分の担当している子どもたちを思い描きながら話を聞くことができました。

子どもたちとの関わりは成長の時期によってぶつかる問題が異なります。病院リハビリは運動発達を促すことに重点を置いた関わりになりがちですが、今回のお話を聞いて、改めて子どもたちの一日の生活の様子を描きながら関わっていくことの大切さを再認識しました。

なお、佐々木先生のお話にも大満足でしたが、今回の研修会場が肢体不自由児を対象とした関養護学校ということで（普段、就学前のお母様方に学校見学を勧めながら自分自身が見学したことがなかったので・・・）、昼休み時間を利用した施設見学はとても楽しみで 施設や設備・教材など、色々拝見させていただきました。

今回、今年度最後の研修会にふさわしい実り多い一日を過ごすことができました。新年度もスキルアップできるよう、自分に活を入れていきたいと思います。

（11月25日、参加者65名にて開催。講義・ビデオ研修・事例紹介・治療実演と充実の内容で、職種を問わず大変分かりやすくご指導いただく。）

さすが この道のエキスパート、理論と実践が 伴っているわ～。

講義風景



— 編集後記 — 岐阜県嚙下障害研究会が発足して、今年は10周年という記念すべき節目の年に当たります。これを受け、成人・小児部門共に 会員の皆様方のご要望にお応えべく活動内容に一層趣向をこらしていきたいと思います。なお、学術講演会（東濃大会）も「ちょっとビッグな内容で！」を合言葉に 目下企画中です。勉強会・学術講演会、ともに皆様の多数のご参加を心よりお待ちしております。（文責：希望が丘学園 田本）